



インド稲門会について



ゴルフ早慶戦

通算成績4勝2敗となり、慶應を引き離すことに成功した。

南口太郎(1990年法学)

デリー近郊に在住の11名により、小西謙作初代会長(1978年教育)のもと、2008年に設立。現在は会員数80名にまで成長した(うち帰任会員の東京支部28名)。クリスマス会、新年会や定期的な親睦会、それにゴルフコンペを中心に活動している。

ゴルフは春・秋の早慶戦や、定期的な如水会との対抗戦などを開催。早慶戦には2008年9月から稲門会、三田会それぞれ20名程度が参加しているが、2011年7月の第6回大会では

インドの魅力

余りがこの地域に集中する。社会インフラは発展途上で、停電や断水、水漏れ、そして過電流による電化製品の故障などは日常茶飯事だ。停電時に困らないようバッテリー搭載のノート型PCを使ったり、無洗米を備蓄しておいたり対策を講じている。しかし、近年道路の整備が進み、日本のODAで建設された首都交通網(MRTS)も開通し、人びとの生活は急速に変わりつつある。

夏(4~6月)は50℃近くに達し、冬(12~1月)は5、6℃まで気温が低下する。その中間にはモンスーンと呼ばれる雨季(7~8月)、そしてありがたくもない「二度目の夏」(9~10月)がやってくるなど気候は非常に厳しいが、変化に富んだ季節の恵みもある。夏にはマンゴーをはじめ、さまざまな果物が店先に並び、目と舌を楽しませてくれる。

インド人にはベジタリアン・ノンベジタリアンの区分はあるものの、基本的には毎食カレーを食べる。スパイスと油が胃にもたれることもあるが、日本人の舌にもとてもおいしい。なかでも、口直しの生タマネギをかじりながら食べるチキンティカ(骨なしチキンをスパイスとマリネにして窯で焼いたもの)は、ビールにも非常に合う。

厳しい気候と環境。そして、あまりにもおそろいかなインド人とのやり取りは、強いストレスを伴うこともあるが、私たちは意外とこの生活を楽しんでいる。

荒木恒二(1994年政経)



高速を走っているこの車には何人乗っているでしょう? 正解は24人!

カレー、ターバン、宗教、マハラジャ、貧困、28の世界遺産、牛、象、IT、20万円の乗用車——インドのイメージはさまざまだ。幹線道路には自動車、バイク、自転車、オート・リクシャー(三輪タクシー)、そして人がひしめき合い、中央分離帯にたたく牛がそれを眺めている。高級ブランドショップが入ったショッピングモールの傍らには、建材や瓦礫が無造作に置かれ、労働者の住居が並び、そして牛や犬、豚が徘徊する。インドを「昭和30年代と2011年の日本が今なお同時に共存している」と表現する人もいます。



タージ・マハル



聖なる牛はどこにでも

ヒンズー教(80.5%)、イスラム教(13.4%)、キリスト教(2.3%)、ターバンで有名なシーク教(1.9%)など、宗教も多様だ。日本の約9倍の面積と多様な人種・文化からなるインドは、その混沌と秩序を1つに包含し、ひと言ではとても言い表せない。公式発表で12億人の人口が、実際には13億5千万人に達するという説もあり、その「誤差」だけで日本の人口を上回るほどのスケールの大きさも強烈だ。

私たちの住む首都デリーを中心とするデリー首都圏(NCR: National Capital Region)には、300を超える日系企業が進出している。インド全体で約3700人の日本人居住者も、1800人

インド稲門会の人びと

People

会長メッセージ

インド稲門会は2008年にデリー近郊に住するメンバーで発足いたしました。

皆さんインドというと、どんなイメージをもたれるでしょうか? 恐らく1つの切り口ではなかなか語れないのがインドではないでしょうか? 世界最大の民主主義国家であり近代化を進めるなかで新たな富裕層が形成される一方で、国民の過半数以上が農業従事者であり、まだまだ貧しい人々も数多く存在します。また、人種・宗教・言語も多岐にわたり、公用語は22言語もあります。このような環境のなかでは、なかなか日本の価値観は通じず、苦労が多い日々が続きます。皆さんが明るく仕事に精進できるよう、稲門会のネットワークが頼みの場となってほしいと思います。われわれ自身がインド通としてそれぞれの職場で活躍することはもちろん、日本とインド両国のためになる活動に1人でも多くの会員が関わられるよう、成長していきたいと思ひます。

2012年は日印国交樹立60周年記念の年です。インド出張などの機会がございましたら、ぜひインド稲門会にご一報ください。お待ちしております。

川村安宏(1981年社学)

●1992年から東南アジアで仕事を始め、4カ国での勤務後、2009年7月からインドで仕事をしています。この間単身でしたが、どこに行っても在留邦人とのつながりは安心と安らぎを与えてくれました。稲門会の皆さんとは会った瞬間から親近感を抱くことができたのは、いうまでもありません。これまで5カ国で「同窓」のもつ深い意味を味わってきましたが、インド稲門会では若いころの感激を味わうことができ大変に喜んでます。これまでの各国の「早慶ゴルフ対抗戦」によく参加しましたが、インドに着任してからの2年間に参加した早慶戦の3戦では全勝! 現在、名簿トップの最高齢者のためインドでの勤務が多分最後のご奉公になりますが、勝ち越しの思い出だけで帰国できることを願っています。「同窓」と聞いた瞬間に感じる近親感や心地良さを今後も大事にしたいと思います。

土井正昭(1967年教育)

会員からのメッセージ

●インドに着任して4年半になります。偶然知り合った稲門の仲間数人と、当時は数軒しかなかった韓国料理店でゴルフの話が盛り上がりました。そして当然、早慶戦をやらう——これが仲間集めのきっかけだったと記憶しています。慶應出身の方に声をかけ、競争で人数を集めたことも



第6回ゴルフ早慶戦祝勝会(川村会長宅にて)

よい思い出です。最近でこそ注目を集めているインドですが、在留邦人は他のアジア諸国に比べ少数です。そのような地であればこそ、同窓をきっかけに、クリスマス、ゴルフ、飲み会等を通じて、仲間を増やしていければと考えています。

小西謙作(1978年教育)

●2007年7月にニューデリーに赴任して、はや丸4年が過ぎました。海外で稲門会に参加するのは1997~2002年のシンガポール以来で2回目ですが、いつも海外での心細い生活を稲門会が支えてくれています。ここインドでは最初は11名の有志で立ち上げました。稲門のメンバーは「恥ずかしがり屋で群れるのを好まない」といわれているので、会員集めに苦労しましたが、今では50名を超す大所帯となり嬉しい限りです。「W」のマークの帽子をかぶり、「WASEDA」マークのポロシャツを着て、三田会や如水会とのゴルフ対抗戦で毎回燃えに燃えています。

福田安展(1983年商学)

●初めての海外赴任でインドに来てから2年半が経過します。生活環境の厳しいインドでの勤務ですが、稲門の皆さんと一緒できるイベントに参加することが娯楽の少ないインドでの楽しみの1つです。私事ですが昨年第一子が誕生しました。満10カ月でインドに連れて来ましたが、到着後1週間で入院。外国人もよく利用する病院ですが、包丁を壁で研いでいる瞬間を目撃してしまい、改めてインドの衛生面に関する認識の低さを目のあたりにしました。そんな息子も今では元気になり、家族3人インド生活を満喫しております。

勝間田丈嗣(2002年政経)